

カール・マルクス

岡 稔

おそらく人間社會が存続するかぎり、社會科學がなく
なることはないだろうし、社會科學が存在するかぎり、
カール・マルクスという人物の人と學説はたえずくりか
えし問題にされるだろうから、したがってまたマルクス
の思想體系の全貌をごく簡潔に要約して初學者の利用に
供するという仕事にたいしても、たえず需要があるにち
がいない。しかし、このような需要に應じることのでき
る人は、たとえ皆無ではないとしても、多分ごく少数に
ちがいない(私自身はもちろんこの少数者の一人ではない)。
マルクスの「人と學説」を紹介することがとりわけ困
難なのは、この人物のスケールがけたはずれに大きいと
いうことのためである。つまりマルクスについてのべる
ということとは、單に一人の經濟學者について語ることで
はなくて、哲學、政治學および經濟學の各分野で多數の

きわめて獨創的な業績を残した一人の思想家について語
るということを意味するが、そのうえ彼は單に廣汎な分
野で仕事をした一人の學究にすぎなかつたのでなく、一
九世紀の西ヨーロッパの革命運動の渦中に身を投じて極
めて波亂に富んだ一生を送った人物であり、そのうえ彼
の思想の影響力はむしろ死後においていっそう増大し、
二〇世紀の二つの大きな革命(ロシア革命と中國革命)は
事實上、彼の思想の産物なのである。
J・シュムペーターは「人間の知力や想像力の大部分
は、食後のひとときか或は一世代か、いづれにせよある
期間がたてば、永久に死滅してしまうものであるが、な
かにはそうでないものもある」とのべて(『十大經濟學
者』)、マルクスをその例にあげたが、多分、マルクスは
一人の人間の思想が人類の歴史にたいしていかに廣汎か

つ持續的な影響を及ぼしうるかということの恰好の見本だといつても過言ではないだろう。

そこで、こういう人物の「人と學說」をすみじかに要約しようとする試みは、あまり成功の見込みのない仕事のように思われるから、ここではつぎの三つのことについてのみだけにする。第一はマルクスが生れてから死ぬまでの六五年間に彼の身の上におこつた主要な出来事、第二はマルクスの經濟學說についての私の感想、第三は彼の學說の研究をこれから始める人にとって、あるいは有益な助言となるかも知れないと思われる二、三の點である。

一

カール・マルクス(Karl Marx)は一八一八年五月五日にライン州のトリエルという小都市のユダヤ人辯護士の家に生れた。當時のヨーロッパはフランス革命とイギリス産業革命の餘波をうけた動亂の時代であったが、ドイツはプロイセンの専制保守政權の支配下にあり、思想的にはヘーゲル哲學の全盛期であった。そしてマルクスの家庭は「かなりの財産もあり教養もあったが、決して革

命的ではなかった」といわれている。

彼の少年時代のことはほとんど知られていないが、ギムナジウムの卒業試験(一七歳のとき)の作文(「職業の選擇にあつての一青年の考察」という題の作文)が残っている。要するに、人は自分自身だけのためではなく人類のために最もよく働くことのできるような地位を選ぶべきだというのが、この作文の趣旨で、純眞な理想主義的少年なら誰でも書きそうなことだが、あとでのべるように、彼が實際に六五年の生涯をまさにそのように生きたということを考えあわせると、いささか感慨ふかいものがあるといえよう。

ギムナジウム卒業後、一年間、ボンの大學で法律學を學んだが、彼の父の手紙によると、ボン時代のマルクスは詩を作ったり、酒を飲んで「ばかさわぎ」をしたり、決闘をしたりすることに主として時間を費した。しかし後にマルクス夫人となったイェンニー・フォン・ヴェストファーレンと婚約を結んだのもこのときであった。のちにベルリン大學へ移つてからは、マルクスは哲學および歴史學の研究に没頭した。はじめてヘーゲルの著作に接したとき、マルクスはその「奇怪な巨岩的メロディ」

に反撥を感じたが、熟讀して尊敬を感じるようになり、尊敬は急速に崇拜になった。彼は神學講師ブルノー・パウアーを中心とする左派の青年ヘーゲル派のグループに加わり、學位論文『デモクリトスの自然哲學とエピクロスの自然哲學の差異について』の中では、ヘーゲルのことを「巨人の如き思索家」と呼んでいる。

はじめマルクスは大學教授にならうと考えていたが、當時のドイツでは多少とも革新的な思想のもちぬしにあっては、それは不可能であった。丁度そのころ、ライン州のブルジョアジーは保守的な「ケルン新聞」に對抗して「ライン新聞」を創刊し、その編集を青年ヘーゲル派のグループに委ねた。そこでマルクスは大學卒業後、この新聞の定期寄稿者となり、のちに主筆となった。當時のマルクスは専制政府を痛烈に批判したが、まだ社會主義者ではなく急進的民主主義者であったといわれている。しかし、新聞記者として時事的な社會問題や經濟問題を取扱わざるをえなかったことが、哲學者マルクスを經濟學者マルクスに轉換させる機縁となったようであり、また、丁度そのころ華々しく登場したフォイエルバッハの唯物論哲學も、マルクスの關心をヘーゲル流の理

念の世界から人間の現實世界へ向けさせるのに貢献した。

「ライン新聞」は政府の壓迫でまもなく刊行が困難になり、マルクスは一八四三年秋にアーノルド・ルーゲ（ヘーゲル左派の中心人物の一人）と共にバリーに移り、そこで『獨佛年誌』という雑誌を發行した。バリーでマルクスはイギリスの經濟學やフランスの空想的社會主義を研究して、ヘーゲルの觀念論の影響から脱けだしていった。『獨佛年誌』に掲載された二つの論文（『ヘーゲル法哲學批判』と「ユダヤ人問題」）および彼の死後に公刊されたこの時期の研究ノート（『經濟學・哲學にかんする手稿』）は、マルクスが青年ヘーゲル派の急進的民主主義者から「マルクス主義者」になっていった當時の事情を知る重要な文獻である。なお、終生の友となったフリードリヒ・エンゲルスとの親交もこの時期に始まった。

一八四五年にプロシヤ政府の要請でフランス政府がマルクスを追放したので、彼はバリーからブリュッセルに移った。ブリュッセル時代に彼は經濟學の研究をつづけながら、のちに「史的唯物論」と呼ばれるようになった彼の独自の立場を確立した。すなわち、かつての盟友で

あるブルノー・パウアーを徹底的に批判した『神聖家族』(一八四五年)によってヘーゲルの觀念論から袂別し、また、當時は出版できなかったがこのときに書かれた「フォイエルバッハにかんするテーゼ」(一八四五年)と「ドイツ・イデオロギー」(一八四六年)においては、フォイエルバッハの唯物論、シュテイルナーの無政府主義、カール・グリュンの眞正社會主義などの批判を通して、自己の立場をかなりはっきりとうちだしている。

彼はまた一八四五年にイギリスにいたエンゲルスを訪問して、イギリスの労働組合主義者やチャーチストと接觸した。彼は「この連中はそもそも理論をもっていないのだから、彼らとの理論的相違などほとんどありえない」と感じたが、一方こゝではすでに「共和制か王制かではなくて、労働者階級の支配かブルジョアジーの支配か」が問題になっていることを、いち早く評價した。

一八四六年冬から一八四七年にかけて書かれた『哲學の貧困』はブルードンの批判という形で、この當時のマルクスの思想を最も體系的に表現した文獻であり、また一八四七年一二月にブリュッセルのドイツ人労働者協會でおこなった連續講演『賃労働と資本』は、マルクスが

未だリカード的労働價值論の立場からではあるが、すでに剩餘價值の理論を確立していたことを示している。

マルクスとエンゲルスは一八四七年一月にロンドンで開かれた「共產主義者同盟」という國際團體の第二回大會に出席して、のちに有名な『共產黨宣言』という歴史的文書となった宣言の起草を委任された。

『共產黨宣言』は一八四八年二月にロンドンで發行された。P・スウィージーがのべたように、『マニフェスト』は社會主義の歴史における決定的な分水嶺を劃するものである。それ以前の思想や經驗は、それに通ずるところの道であり、それ以後の發達は、それから發するものである。『歴史としての現代』(五頁)『共產黨宣言』によって社會主義を「空想から科學へ」轉換させるといふ仕事が成就された。それはマルクスが三〇歳のときのことであった。

まもなく一八四八年の革命がおこり、ベルギー政府はマルクスに國外退去を要求した。彼は丁度そのときフランス臨時政府の招きをうけたのでパリに行き、さらにエンゲルスと共にケルンに歸って『新ライン新聞』の編

集をすることになった。ごく短期間ではあったが、『新ライオン新聞』は「民主主義の機關紙」としてかなりの名聲を博したようであり、発行部数は六千部に上った。

(E・H・カーによれば當時のロンドン『タイムズ』が約三萬の発行部数をもっていた以外、イギリスの他の日刊紙で八千をこえるものはなかったという。)しかし、まもなく反革命の勢いが増大したので、『新ライオン新聞』は廢刊を餘儀なくされ(一八四九年五月)、マルクスははじめパリへ、つぎにロンドンへと亡命の旅をつづけた。一八四九年八月にロンドンに着いたマルクスは、残りの三〇餘年の生涯をこの地で過した。

ロンドンにおけるマルクスの生活は、一言でいえば言語に絶する貧苦の中での精力的な經濟學の研究と革命運動(第一インターナショナル)への献身の生活であったといえる。

マルクスはほんのしばらくのあいだ家具つきの下宿にいたが、その間に『新ライオン新聞』の刊行計畫などに所持金を費いはたして、最も貧しい外國人移民の住むソホの貧民街に移った。彼の収入は『ニューヨーク・タイムズ』などへの寄稿による僅かのかせぎ以外には、

エンゲルスの氣まえのよい援助とマルクスの外套や妻の銀食器を入質してえた金以外にはなかったので、「この八―十日間、毎日パンとジャガイモだけで今日はそれすら手に入るかどうか分からない」(エンゲルスあての手紙)というありさまであった。マルクス夫妻は全部で六人の子供をもうけたが、一人の娘と二人の息子をこのソホ時代に失った。子供が死んでも棺桶を買う金さえなかったこともあったといわれている。

しかしマルクスはこの極度の貧窮の中で、大英博物館の讀書室を仕事場として、彼が「經濟學のとてつもない細部」と呼んだものに没頭した。彼は毎朝の九時から夜の七時まで大英博物館でイギリス古典經濟學のあらゆる文獻を讀破し、夜になると深更にいたるまで執筆し、そしてとめどなく煙草をのんだ。J・シュムペーターは「經濟理論家としてのマルクスは何よりもまず非常に學識豊かな人であった」とのべている。「マルクスは飽くことを知らぬ讀書家であり、うまずたゆまず仕事をする人であった。讀むに値する文獻で彼の目にふれないものはほとんどなかった。しかも讀めば必ずこれを消化し、文化的全般にわたり長期的な歴史的視野で物事を考える

のを常とした學者にしては異例の熱意をもって、あらゆる事實や議論を根ほり葉ほり詮索した。批判や拒否、承認や齊合を通じてマルクスは、あらゆる問題の底の底まできわめるのを常とした。彼の勞作『剩餘價值學說史』はこのことを明らかに證明しているが、この書はまさしく、彼の理論的熱意の記念塔である(『十大經濟學者』四〇頁)と。

『經濟學批判』(一八五九年)と『資本論』(第一卷、一八六七年)は、このような惡條件のもとでの異常な精進によって生みだされたものであった。

一八六〇年代のおわりにエンゲルスはマンチェスターにいる共同經營者に業務を譲り、マルクスに三五〇ポンドの年收を與え、自らもマルクスの近くに居を移した。一方、マルクスの二人の娘は裕福なフランスの社會主義者に嫁いだ。こうして、彼の生活條件はようやく幾分改善されたが、そのころからマルクスの健康は衰えて、慢性的な病氣に悩まされるようになった。

一八六四年にイギリスの勞働組合指導者とフランスの社會主義者が發起人となって、國際勞働者協會(第一インターナショナル)が設立された。マルクスはこの協會の中

心人物として各國の社會主義者に助言を與えた。彼はバクーニン、ラッサールなどとの理論闘争やフォークト、デューリングなどとの紛争に多くのエネルギーを費しながら、『資本論』の完成のための努力を續けた。一八七一年にバリー・コンミュンにさいして書かれた『フランスにおける内亂』やドイツ社會民主黨の綱領を批判した『ゴータ綱領批判』(一八七五年)、E・デューリングの批判を通して自らの思想を要約して示した『反デューリング論』(エンゲルスとの共著)などは、晩年のマルクスの主要な勞作である。

一八八一年にマルクスは文字どおり糟糠の妻であったイェンニー夫人を失った。エンゲルスは「イェンニー・マルクス葬送の辭」の中で「他人を幸福にすることのうち自身に幸福をみいだした女性がかつてあったとしたら、それは彼女であった」とのべた。だがマルクスは病氣のために葬儀にも參列できなかった。しかし、マルクスは死の直前まで、なお、地代論を完成するためにロシアの農業事情の廣汎な研究をつづけていた。しかし、一八八三年の冬に氣管支炎が悪化して、ついに一八八三年三月一四日にマルクスは肺潰瘍のために死亡した。

彼はハイゲート墓地に葬られ、十二、三人の會葬者をまえてエンゲルスが葬送の辭をのべた。「ダーウィンは生物學の發展法則を發見したように、マルクスは人間の歴史の發展法則を發見した。」それだけでなく彼は「資本主義生産様式とそれによってうみだされたブルジョア社會の特殊な運動法則をも發見した。」しかし、マルクスは科學者として偉大であつただけでなく「なによりもまず革命家であつた」とエンゲルスはのべた。「資本主義社會とそれによってつくりだされた國家制度の倒壊に何らかの仕方でも協力すること、近代プロレタリアト……の解放に協力することこそは、彼の生涯の眞の生命であつた」と。多分、エンゲルスのこの葬送の辭は、「マルクスの人と學說」の最も簡潔な要約だといえよう。

二

しばしば言われているように、過去の思想家の著作に接する仕方には二つのやり方がある。そのひとつは現在われわれが問題にしている問題にたいして、その思想家がどのような解答をあたえているかを調べるというやり

方であり、もうひとつはその思想家がどういふ問題に直面していたのかというところ、つまり彼が解答を與えようとしたのはどういふ問題であつたかを調べることである。偉大な思想家とか現代的意義をもつ思想家といわれる人物のばあいには、この二つの接近方法はしばしば合一する。というのは、彼が解答を與えようとしていた問題の少くも大半は、現在われわれが問題にしている問題と同一であるかまたは緊密な關連をもっていることが、多いからである。かなり異なる時代の異なる國に生きていた思想家の著作が後世の人々にたいして強い魅力をもつ理由もまたこゝにある。ことに彼の與えた見通しが、そのごの實際の歴史と多少とも合致しているばあいには、この魅力は倍加される。マルクスのばあいがまさにそうであつた。

しかし、實はこゝにやゝもすると陥りがちな危険な落とし穴があるように思われる。つまり、マルクスが解答を與えようとした問題がどんな問題であつたかという點についての反省を全くぬきにして、彼が定式化した個々の命題や結論を直接にわれわれの直面している現實に適用することに熱中するというのがそれである。このような

「現實的適用」の結果として、彼の學説が一〇〇パーセントの現實性をもっているということ、つまり彼が全能の豫言者であったということが發見されるか、それとも逆に彼の學説が今では全く陳腐化してしまつたということが發見されるかは、あまり重要な問題ではない。というのは、いずれにせよ彼の思想にたいする接近方法としては同一だからである。つまり、いずれのばあいにも、彼の思想と現代的問題との關連がごく皮相に觀察されているのである。彼の思索と研究の問題意識や方法ではなくて、彼の到達した個々の結論的命題だけを取り出して、われわれの直面している現實の本質ではなくて表面的諸現象と對比するのは、結局、彼の思想と現代世界との表面的な關連に目を奪れて、もっと深いつながりを見失うことになりがちである。

具體的な例をあげると、M・ドップによれば、W・レオンチェフはかつて「資本主義制度の長期的傾向」についてマルクスの「かがやかしい分析」を賞讃して、つぎのようにのべた。「この説明はまことに感銘深いものである。——富の集積の増大、中小企業の急速な排除、競争の累進的な制限、不斷の技術進歩とそれにともなう

固定資本の重要性の増大、そして最後に、以上のどれにも劣らないほど重要な、反復する景氣循環の波の擴大、これらはまことにこの上なく見事な一連の豫測をなしたげたものといふべきであり、これに比べると、近代經濟學は、そのあらゆる洗練にもかかわらず、ほとんど何事をも明らかにしなかつたのである」と『經濟理論と社會主義』II、六八頁)。J・シユムペーターもまた、マルクスが生きていた時代の情況を考慮するなら、「大企業の出現を豫言するということだけでも確かに一つの偉業であつた」(前掲書、六三頁)とのべたし、またE・H・カーは「總じてその豫言においてマルクス以上に見通しのよかつた人は少い」(『カール・マルクス』未來社、四一四頁)ことを認めた。これらはいずれも非マルクス主義者による言明であるが、同様の趣旨の言葉をマルクス主義者の著作から蒐集することは、多分、いっそう容易である。

もちろん、私は、マルクスが甚だ「見通しがよかつた」こと、「長期的傾向」についての「かがやかしい分析」をあたえたことを否定するつもりは、毛頭ない。マルクスは單に資本の集中、等々のレオンチェフの列擧した一連の事項について見通しがよかつたゞけでなく、勞働運動

が未だ全くの萌芽期にあった當時にすでに勞資の對立が現代社會における最大の葛藤となるであろうことを豫想したのみでなく、この階級闘争が究極的には社會主義による資本主義の代置に導くであろうことさえも極めて斷定的に豫言していたということを附け加えてもよい。しかし、それにもかゝらず、もっぱらこのような視角からマルクスの學說に接するのは、正しい接近方法ではないように思われる。

というのは、マルクスの見通しのよさにたいするこのような賞讃は、彼の見通しの悪さにたいする非難と背中あわせになっていることが、しばしばあるからである。

たとえば最も進んだ資本主義國ではなくてロシアや中國のような國が、社會主義への移行の先頭を切るだろうということを、いちはやく豫言しておかなかったという理由で、憐むことなくマルクスを非難している人がいることは周知の事實である。またいわゆる「人民資本主義」の擁護者たちの勞作をひもとけば、マルクスが自らの死後における資本主義の發展によって生みだされる一連の新しい諸現象を、まえもって豫言しておかなかった多數の例、つまり彼の「見通しのわるさ」を立證する多數の事

例が列擧されている（たとえば、所有と經營の分離、ホワイト・カラーの増大、社會保障制度の發展等々）。そしてこれらの人々によれば、マルクスの學說はまさにこのような「見通し」のわるさの故に今や全く無價値なのである（それは丁度、見通しのよさの故に價値を認められるばあいの逆である）。

「見通しの當否」についていかぎり、マルクス死後の資本主義的發展によって生みだされた一連の現象の中には、マルクスによってすでに示唆されていたものもあるし、そうでないものもあるというのが唯一つの公平な觀察だと私は考えているが、このような觀察は公平というよりむしろ甚しく平板で愚劣にさえみえるかもしれない。しかし、それはとりもなおさずマルクスを「一個の豫言者」にみたてるといふ接近方法の愚劣さのためである。要するに、マルクスが彼の研究の結果として到達した個々の結論や命題を、直接にわれわれの直面している現實に適用するというやり方で、彼の思想に接するのは、やゝもするとマルクスを一種の全能の豫言者にみたてるか、または彼があたかもわれわれの同時代人であるかのように遇することになりがちである。くりかえして

いうが、多くの人々が異口同音に認めるように、マルクスは驚くほど「見通しがよく」、また、彼の文章はわれわれに時代の差異を忘れさせるほど生ま生ましいリアリティをもっているばあいがしばしばあるが故に、彼の思想の現代的意義を皮相ではなく、正しく評價することがいっそう困難になるのであり、彼が実際に解決を與えようとしたのはどういふ問題であつたのかを冷静に反省してみることが特に必要となる。

個々の現代的な問題にたいする直接の解答をマルクスに求めるのに比べて、このような接近方法、つまり彼が解答を與えようとした問題をふりかえてみるというやり方は、迂遠なようにみえる。しかし、実際にはこのような廻り道をした方が、彼の思想とわれわれの直面している問題との眞のつながりをいっそう深くつかむことができる。したがってまた、われわれがマルクスから何を學ぶ必要があるのかということ、何故に一世紀まえの著作が經濟學を學ぶ人にとって、同時代人の著作以上の感銘を與えることができるのかということをも、知りうるように思われる。

こゝで「マルクスが解答を與えようとした問題」とい

うのは、彼が自らの思想體系を首尾一貫したものとして展開するにあたって處理しなければならなかつた一連の個々の問題點のことではなくて、マルクスをしてそのような思想體系の構築におもむかしめたところの、基本的問題意識のことをさしているのである。つまり、マルクスの達成した業績を評して、人はしばしば、倒立していたヘーゲルの辯證法をマルクスが正立させたとか、ダーウィンの生物進化論にも匹敵する社會進化論を樹立したとか、ベティからリカアドオにいたる歴史をもつ勞働價值論を完成したとかいふのだが、これらの業績は彼が研究の結果として達成した成果であつて、彼の思索と研究の内面的な動機ではない。たとえば、彼がリカアドオとリカアドオ學派の學說のあらゆる細部を執拗にせんさくしたのは、リカアドオにたいして何か個人的な關心や愛着をいだいていたためではなくて、彼が解答を與えようと思つていた問題にとつて、リカアドオの批判的攝取と克服が缺くべからざる必要事であつたという事情によるということ、いふまでもないことである。

いささか感覺的な表現をするなら、マルクスが全生涯をあげて異常な精力と情熱をかたむけて取組んだ基本的

な問題は、一言でいえば「資本主義と人間」というテーマであったと私は考えている。つまり、多くの輝かしいものと暗黒なものともたらした、この資本主義という社會體制が、究極的に人類の歴史にとってどういう意味をもつのかという問題である。マルクス以前にもマルクス以後にもこの問題が、マルクスにおけるほど全面的かつ根本的に掘りさげて研究されたことはない。(あとで述べるように、非マルクスの經濟學においては、このような問題が全く度外視されていることもしばしばある。)そしてマルクスの思想が強く現代人に訴える力をもっている主たる理由もここにありようと思われる。

マルクス經濟學のこの根本性格(つまり人間解放という見地からする資本主義社會の運動法則の探究)は、さきに簡単に要約したマルクスの経歴からも、容易に知られる。つまりマルクスは同時代の他の多くのヒューマニスト(フランスの空想的社會主義者やドイツの青年ヘーゲル派哲學者やフォイエルバッハやイギリスのリカアド派社會主義者など)と同様に、フランス革命によって代表される人間解放の思想と現實世界の實生活との間の矛盾に苦しめられていた。マルクスがはじめ強い影響をうけたブルノー・

パウアーやフォイエルバッハは人間の解放の道を宗教批判に求めたのだが、マルクスは、觀念の世界ではなくて社會の經濟生活に目をむけた。そこで人間の解放は、「市民社會」からの解放という形をとり、イギリス古典派經濟學の流れの中でこの問題を追求することによって、つまりマルクスのいい方では「經濟學の批判」に従事することによって、「資本主義社會の運動法則の曝露」に到達した。それは勞働價值論の完成であると同時にまた空想から科學への社會主義の發展でもあった。ヘーゲルやフォイエルバッハや空想的社會主義者やリカアドォは、マルクスが「資本主義と人間解放」というテーマにたいして、「科學的社會主義」という解答を與えるための媒介物であったといえよう。

古典派經濟學のばあいには、資本主義と人間という問題がマルクスのばあいのように鋭く意識されないのは、主としてつぎの事情のためである。第一に、古典派のばあいには資本主義制度は自然の永遠の秩序とみなされていた。つまり、彼らは實際には資本主義經濟を問題にしながら自らは經濟一般を問題にしているかのよう考えていたのである。第二に、彼らは資本主義經濟を本質的に

調和的なものとみなしていた。つまり階級利害の對立や資本主義の矛盾の現われをたまたま發見しても、それは調和が達成されるまでの一時的な現象にすぎないとみならずか、または資本主義が完全に自らを實現することを妨げる何らかの外的事情のためだと考えがちであった。このことはもちろん、資本主義が唯一の經濟秩序だとみなされていたという第一の事情の必然的な歸結である。

いわゆる近代經濟學のばあいにも、この二つの點では多かれ少なかれ古典派のばあいと同様である。つまり、今ではリカードのばあいほど素朴に資本主義經濟と經濟一般が同一視されることは少いが、どんな非マルクスの經濟學者も資本主義という概念にたいして決してマルクスほど明確に限定された規定を與えたことはない。そしてまた、レッセ・フェールによって極大満足が實現されるという保障がないということは、今では誰でも認めることだけれども、既存の經濟秩序のわく内で處理できないような矛盾は存在しないはずだという公準は繼承されている。そのうえ、近代經濟學は、古典派やマルクスのばあいのように、近代社會の運動法則の究明という綜合的なテーマからはなれて、分析用具の製作という作業

に自らの對象を限定する傾向を強めた。

たとえば、シュムペーターはマルクス經濟學の綜合的性格についてつぎのようにのべている。「マルクスの綜合は、戰爭、革命、立法の變化等の如きあらゆる歴史的事件、ならびに財産、契約關係、政府の形態等の如きあらゆる社會制度を包含しているが、これにたいして非マルクス經濟學者は、常にそれを攪亂要因ないし興件として取扱ひ、それらを説明することを目的とせず、たゞその作用の仕方や結果のみを分析することに止めようとする」。「マルクス體系に獨自の特徴は、これらの歴史的事件や社會制度自體をも經濟分析の説明過程の中に入れていくこと、あるいは専門語を以てすれば、それらを興件としてではなく、變數として取扱ひていることに存する」と(『十大經濟學者』八七頁)。

シュムペーターはこのようなマルクスの「綜合性」によって果してどれだけの利點がえられたかを疑っている。しかし、少くもつぎのことは明白なように思われる。すなわち、マルクス經濟學はシュムペーターがこゝに正しく敘述したような特有な特徴の故に、資本主義社會の個々の現象や全體としての資本主義生産様式が、結

局のところわれわれにとってどういう意味をもっているのかという問いに答えることができるのだが、かゝる综合性を缺く経済學はまさにそのような問題については、マルクスの回答にとって代りうるような回答を興えることができないということがこれである。

マルクスの経済學説の根本的性格についての以上のような見方からひきだされる結論、つまりマルクスをこれから學ぼうとする人々にとって参考になりそうな結論は、つぎの二點である。

第一は、資本主義經濟體制というもの、つまり現在われわれが住んでいるところの經濟社會は、人類の歴史にとって究極的にどういう意義をもっているのかという問題を、根本的に考えてみようという問題意識を丸つきりもたないでマルクスの著作を讀んでも、ほとんど何の感銘もうけないであろうということがそれである。それはいわば中波の受信機で短波の放送を聞こうとするようなもので、主體と客體（つまりマルクスの思想）とが同調しないのであり、せいぜい個々の斷片的な知識をえるに止って、マルクスの思想を多少とも理解したことにはならないであろう。

第二に、マルクスはさきよのべたようなきわめて普遍性をもったテーマ（近代資本主義社會の運動法則）を追求したとはいえ、他のすべての思想家と同様に、彼もまた先行者の思想によって提起された問題を論じるという形でのみこの普遍的なテーマを取扱ったのである。具體的にいえば、彼はヘーゲルやバウアーやシュティルナーやフョイエルバッハなどの問題を研究することを通して史的唯物論に到達し、古典派經濟學者、なかでもリカードの残した問題を追求するという形で資本主義經濟の分析を展開したのである。したがって、われわれがマルクスの著作を讀んで彼の議論をどこまで完全に理解しうるかは、彼が自らの議論を展開するさいの前提となつてゐる先行者たちの思想を、われわれがどれだけ身近に感じているかによつてきまる。もちろん、先行者の研究なしには、マルクスの議論を理解することが全く不可能だといふわけではない。しかし、マルクスと共通の基本的問題意識（資本主義と人間解放）にたつとだけでは、つまり彼がこの問題を處理した特殊な形態（歴史的社會的に制約された特定の形態）についての知識が不十分であれば、それだけわれわれのマルクス理解は不完全になるの

である。

マルクスのようにイギリスの經濟學とフランスの社會主義思想とドイツの哲學に廣く通じていたといわれる人のばあいには、この點でのわれわれの困難はなみなみならぬものがあるといえよう。經濟學說にかぎっていえば、マルクスの議論を理解するにあたって、リカアドオのもつ意義はほとんど決定的なように思われる。「マルクス經濟學の眞の理解は、理論家としてのマルクスがリカアドオの弟子であったことの認識からはじまる」というシユムペーターの言葉は、この意味では全く正しいように思われる。ドイツ哲學やフランス社會思想にかんしては、私はこゝでとやかくいう資格をもっていない。

三

最後に、これからマルクスを勉強してみようとする人のために、彼の甚だ尨大にしておかなり難解な著作のどれから読んでゆくのがよいかという點について、氣のついたことを二、三のべておくことにしたい。

しばしば問題にされることだが、マルクス、エンゲルス自身の著作をまず讀むべきか、それとも何か豫備的な

入門書から始めるべきかという問題がある。マルクスの生涯や學說の全貌についての信賴できる概説書をまず讀むということは、決して悪いことではないだろう。マルクスの傳記では、F・メーリングのものが今なお最も定評のあるものであるが、やゝ大部にすぎるかもしれない。小冊子としてはレーニン『カール・マルクス』やエンゲルスの小論文『資本論』の書評や『資本論綱要』などがある。つぎに後世のマルクス研究者の手になる『資本論』や史的唯物論にかんする解説者や入門書についていえば、私はこれらの解説書の中に多數の優れた参考書が含まれていることを否定するつもりは毛頭ないけれども、マルクス自身の著作を讀むまえに、どうしても讀まなければならないような特殊な入門書というようなものはない、と私は考えている(少くも大學の學生についていふかぎりはそのうである)。これらの解説書や入門書は、多分、自分でマルクス、エンゲルスの著書を通讀したのちに、自分のマルクス理解を整理したり、補足したりするのに利用した方がいっそう有益である。

ところで、入門書よりはまず原典を讀むとしたばあいに、何から手をつけるかという問題がある。多分、それ

はほとんどどうでもよい問題であろう。というのは、多少とも十分にマルクスの思想を理解するためには、結局、かなり多数の著作に目を通さなければならぬことになるというのが第一の理由であり、そのうえ、どんなに「やさしい」といわれているものでも、もっともむづかしいといわれているものに目を通してからはじめて正しく理解しようのような要素を含んでいることが多いからである。だから、何からはじめるかという問題は、どうみても二次的な問題以上のものではない。

初期の労作から順を追って読むというようなことは、もちろん、推奨されるべきことではあるまい。たとえ、専門のマルクス学者になろうとする人についてさえ、おそらくそうである。『資本論』はいうまでもなくマルクスの主著であり、少くもその全三巻を通讀することなしにマルクスの思想を理解することは不可能なのだから、とにかく『資本論』だけは讀むというのも、確かにひとつの方法であるかもしれない。しかし、『資本論』冒頭のいわゆる價值論にはどうしても興味をもてないという人が多いであろう。むしろ私は『資本論』や『經濟學批判』の冒頭の商品にかんする分析にたいして、最初から強い

興味をもつような人がありうるとは信じられない（その人が經濟學史ことに古典派經濟學についてのある程度の専門家でないかぎりはそのようである）。

そこで、この難關を迂回して進む方法が、古くからいくつか指摘されている。ひとつは『賃労働と資本』、『賃金、價格、利潤』、『共產黨宣言』、『空想から科學への社會主義の發展』などのように、取りつきやすい小冊子からはじめるという方法である。もちろん、これらは『資本論』を讀む代りにはならない。しかし、マルクスの經濟學や史的唯物論の主要點についてのこれらの著作の平明な敘述を通過することによって、『資本論』への興味と自信とをつけることができよう。前の二冊はいわば『資本論』第一巻の中心テーマ（つまり資本と労働との關係）のきわめて平明な説明であり、後の二者はマルクス主義の根本思想の敘述である。

つぎに、もうひとつの迂回方法は、理論的な分析ではなくて、歴史的記述から近づくという方法である。たとえば、『資本論』第一巻第三編の労働日にかんする章、第四編のマヌファクチュアや大工業にかんする章、第七編の蓄積の一般法則の例證や本源的蓄積にかんする章、あ

るいはまたエンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』などがそれである。E・H・カーのようにマルクスの経済理論にはほとんど価値を認めない人でも、これらの歴史的記述だけでは高く評價しており、「前世紀の中頃のイギリスの労働者階級が、男も女も子供も、生活を支えるにたる賃金より幾分少い賃金をもらう返禮として、彼らの雇傭者のために利潤を稼ぎだしていたところの、恐るべき生活条件のものを『暴露』は『資本論』の中でその価値をもちこたえている」ことを認めている(『カール・マルクス』三八一頁)。カーのいわゆる「ものすごい暴露」を読むことによって、理論的な編への關心をそそられる人もあろうし、また、たとえそうならなくても、少くも経済学というものは國民所得や物價指數や國際收支や公定歩合やダウ平均株價の動きだけではなくて、もっと別の分野にも目を向けなければならぬということを教えられようという利點だけはあるだろう。

ところで、以上のような迂回は『資本論』を読む代りになることではなくて、読むための準備である。『資本論』全三卷(できれば『剰餘價值學說史』も)を曲りなりにも通讀することなしには、マルクスの経済学を學んだと

いうことはできない。『資本論』を讀もうとする人にとっては、「價值形態にかんする節を除けば、理解しがたい」といって本書を非難することはできないであろう」というマルクス自身の言葉(第一卷第一版序言)が讀者にとって、何よりの激勵となろう。(もっともマルクスはこれにつづけて「もちろん私は、新たなものを學ぼうと欲する、したがってまた自分で思惟しようとする讀者を想定しているのである」とつけ加えている) 價值形態にかんする説明は、『經濟學批判』と『資本論』第一版と第一版附録と『資本論』第二版という四通りの敘述がマルクス自身によって残されていることをみてもわかるとおり、著者自身が最も苦心した部分である。商品の價值形態もしくは生産物の商品形態はマルクス自身がのべたように、「ブルジョア社會にとつては……經濟的な細胞形態」であり、それはマルクスの資本主義把握の鍵であると同時にまたわれわれのマルクス經濟學理解の鍵でもあるが、その反面、價值形態にかんするマルクスの説明の中には、『資本論』全三卷やさらには『剰餘價值學說史』を讀了してはじめて理解できるような要素も含まれている。だから、卒然と讀んでほとんど分らなかつたとしても必ずしも失望するに

は及ばないのである。これは價值形態論にかぎらず、『資本論』全體についていえることだが、マルクスのよ
うな天才が數十年にわたって心血を注いだ研究の成果で
ある『資本論』のような書物を、一度讀むだけですっか
り理解してしまおうなどと望むのは、途方もないことであ
らう。

以上はマルクスの經濟學說を學ぶという觀點からのべ
たのであるが、史的唯物論ないしはマルクスの思想全般
についていふばあいには、古くからしばしばいわれてい
るように、エンゲルスの『フォイエルバッハ論』、マルク
スの『ドイツ・イデオロギー』、『家族、私有財産および
國家の起源』なども、必讀文獻であり、しかも比較的
「やさしい」ものだとされているが、これらについては
ここでこれ以上ふれることはできない。

最後に、マルクスもしくはマルクス經濟學にかんする
研究書について附言すると、『資本論』自體の解説書とし
ては、H・ローゼンベルグ『資本論註解』五冊(改造社、
一九五三年)と河上肇『資本論入門』(三笠文庫、一九四八年)
が、いずれも今となっては古いといわれているけれども、
やはり定評のあるものである。

マルクス經濟學を古典學派と関連させて研究しようとする
ばあいの参考書としては、L・ミック『勞働價值論
史研究』(日本評論新社、一九五八年)と久留間絞造・玉野
井芳郎『經濟學史』(岩波全書、一九五四年)をあげること
ができる。また、近代經濟學との對比に重點をおくば
あいには、M・ドップ『政治經濟學と資本主義』(岩波書
店、一九五二年)やP・スウィージー『資本主義發展の理
論』(日本評論新社、一九五一年)が参考になろう。また、
マルクス以後にマルクスの取扱わなかつた問題をマルク
ス經濟學の方法で研究した最も重要な文獻としては、少
くもK・カウツキー『農業問題』(岩波文庫)、R・ヒルフ
ァディング『金融資本論』(大月書店、一九五二年)、B・
N・レーニン『帝國主義論』(レーニン全集、國民文庫、岩
波文庫その他)は看過すべからざるものといふべきであ
り、また、ソ同盟科學アカデミー『經濟學教科書』(合同
出版社、全四冊)も、古典の學習と現代的問題とをつなぐ
媒介環として有用であろう。

反マルクスの立場からするマルクス批判の書として
は、經濟學についてはE・ボエームバヴェルク『マル
クス學說體系の終焉』(日本評論社、昭和六年)、唯物史觀

についてはアンリー・セイ『唯物史観と歴史の經濟的説明』(日本評論社、昭和六年)が、最も代表的なものであり、その他のものは(二、三の例外を除くと)この兩者の論點を反復しているにすぎない。また、有名な近代經濟學者によるマルクス經濟學研究書としては、J・シユムペーター『十大經濟學者』(日本評論新社、一九五二年)とJ・ロビンソン『マルクス經濟學』(有斐閣、一九五二年)が、最も代表的なものである。

最後に、これらのマルクス研究文獻の利用について一言つけくわえると、たとえどのような立場から書かれた

ものにせよ、それが著者の眞剣なマルクス研究の成果であるかぎりには、新たにマルクスを學ぼうとする人にとって、多かれ少なかれ有益な示唆をもたらし、初學者が自らの「マルクス像」を形成する參考になるにちがいない。しかし、その役割があくまでも補助的なものであることはいうまでもない。

なお、この小論でふれた一連の文獻の正確なタイトルとここでふれなかった多數の參考文獻については、『經濟學の學び方』(白桃書房、一九五八年)や遊部久藏編著『資本論研究史』(ミネルヴァ書房、一九五九年)所載の文獻目録を参照されたい。(一橋大學助教)